

# 白川教授の詩経研究

龍谷大学教授 小南 一郎

詩経は、白川静教授が生涯を通じて探究を重ねられた対象一つであった。若い時代に精読した書物の一つとして、教授は、朱熹の「詩集伝」を挙げておられ、詩経への関心から、清朝の学者たちの著述にも広く目を通すことになったといわれている。また、博士学位請求論文とされたのも、詩経研究の核心部分をなす、「興の研究」であり、同じく東アジアの古代歌謡である「万葉集」への探求を進められたのも、詩経に対する関心と切り離せないものであった。

このように白川教授の中国古代文化探索の核心部分に、常に詩経が存在していた。しかし、これまでに、教授の漢字研究や神話・思想研究について言及する人は多かったが、詩経研究に対しては、それを正面から取りあげ、そこに示される教授独自の視点や方法論、それを通して得られた成果について論じた人はほとんどないように見える。たしかに「稿本詩経研究」や、とりわけ「興の研究」はむつかしい書物である。一度や二度の読書で、こうした書物が十全に理解できるとは思えない。そうではあるにしても、教授の古代文化研究の中でも核心部分に位置した詩経研究を無視しては、その学問のことを語ることはできないのではなからうか。

白川教授の研究に導かれながら、わたし自身もこれまで、詩経のことを少しずつ考えてきた。詩経については、中国の経書の一つとして、古来、無数と言ってもよいほどの注釈書があり、また詩経の成立やその内容について論じた書物や論文も、数え切れぬほど存在している。しかし、そうした莫大な数の著述の中で、われわれが詩経について考えようとするとき、本当に有用なものは、きわめて数が限られているように思う。多くの書物が経学的なドグマで詩経を解釈し、そうでない書物も、実証の伴わない独断で詩経を理解しようとしているのである（現在にも、そうした書物は少なくないように見える）。ドグマに

も独断にも陥らず、説得的な議論を展開している書物は数少ないのであるが、そうした限られた数の書物の中にあっても、わたしにとっては、問題意識を共有できる書物の筆頭が、白川教授の詩経をめぐる一連の著作なのである。

以下に、わたしが理解する、教授の詩経研究の方法と内容とについて書いてみたいと思う。もちろんそれは、教授と関心を共有する部分への言及が中心になり、教授の研究の全体像を捉えきれないのかも知れない。ただ、以下に記すような理解が、わたしの白川教授の研究に対する、価値評価をこめた位置づけであると同時に、わたしの詩経研究の基盤となり、出発点ともなっているのである。

詩経三百余篇の各々の作品の前には、小序と呼ばれる序文が付けられており、その作品が、いつの時代に、誰の手によって、いかなる意図のもとに作られたかが述べられている。もしこの小序の言うところがそのまま信じられるのであれば、詩経に対する探究は、ずいぶんと容易になっていたはずである。しかし、この小序の説明が信じられないことについては、歴代の学者たちがさまざまな方向から論じて来た。とりわけ、小序は詩経の詩篇の内容に道徳的な教戒を読み取ろうと努めているのであるが、宋代の朱熹が詩経の中に男女の恋愛歌として読むべきものが存在することを指摘するなど、小序の道学的な詩経理解に対しては、さまざまに疑問が呈されて来たのであった。漢代以来の詩経学の進展は、小序への疑問の深まりと並行していたと言えるのかも知れない。

白川教授も、『詩経研究通論篇』の第二章、説話詩の研究、において、小序がそれぞれの作品の背後にあったとしている歴史的事件を網羅的に検討し、個々の作品と、小序が関連づけている事件との間に、なんら必然的な関係がなかったことを論じられた。小序の作者は、主として春秋左氏伝を使って、詩経の個々の作品を順番に、むりやりに歴史的な枠組みの中に押し込んだことを詳しく論証されたのである。上述のように、これまでも小序に対してはさまざまな疑問が呈されていたが、作品の内容と小序との間に大きな矛盾がない場合には、ひとまず小序が提出した枠組みの中でその意味を解釈しようとする折衷的な態度を取る注釈も少なくはなかった。そうした中であって、教授は、古来の注釈が援用して来た、作品内容の意味づけも、作

品制作の背景となつたとされる歴史的事件との関係づけも、ともに架空のもので、まったく抛り所にならないことを説得的に示されたのである。

このようにして、古くより、詩経を読むための基礎となつて来た、経学的な枠組みが完全に虚妄なものだと知られたとき、詩経を正しく理解するために、われわれは、まったく新しい視点と方法とを、一から求めなければならなくなつた。詩経に対する研究は、まだ緒に就いたばかりで、その研究を一步、前に進めるために、従前にはない、新しい挑戦が待たれていると言つてよいであろう。

詩経が小序の呪縛から開放されたあと、まったく新しい視点で、その本文を読みなおさねばならなくなつたのであるが、そのための挑戦はすでにいくつかなされていく。たとえば、マルセル・グラネの『中国古代の祭礼と歌謡』の仕事について、白川教授は、詩経に対する古典的研究に終止符を打ち、まったく新しい観点で詩経を研究したものと位置づけておられる。グラネは、詩経の形成の場を中国古代の農村に求め、その共同社会における祭礼の中の舞踏歌や男女の歌による掛け合いが詩経の詩篇形成の基盤となつたとする論を展開し、そうした視点で詩経の各作品を読みなおした。教授は、こうしたグラネの観点を評価される一方で、グラネが詩経形成の過程をあまりにも単純化したことに対しては不満を表明される。詩経の歌謡の起源をもつばら古代農村の季節の行事の場に限定していることに、疑問を呈されたのである。

もちろん、白川教授は、グラネが説くような場で詩経が形成されたことを否定しているのではない。グラネが想定しているのは、詩経の詩篇を育てた場の一つの過ぎないとされるのである。ただ、詩経の多様な内容の詩篇がどのように形成されたのかに興味を懐く者の一人としては、教授が、グラネの理論に、必ずしも正面から対峙しておられぬように見えるところがあるのを残念に思う。グラネが言うような場は、詩経を育んだ場の一部分に過ぎないとしておられるのであるが、そうした農村の祭礼の場が、詩経形成の基盤全体の中で、どれぐらいの大きさを占め、それ以外の部分を形成した場とどのような関係を持つと考えられるのか、詳しいご意見を聞きたかつたと思う。

グラネ説に対して軽いなされたような感じがするのは対照的に、教授が正面から立ち向かつておられるのは、松本雅明

氏の『詩経諸篇の成立に関する研究』が展開する詩経理解の方法とその結論とである。松本氏の詩経研究も、これまでの伝統的な研究を大きく越えたもので、独自の視点と方法論とをもって、詩経の形成について根本から考えなおそうとしたものであった。松本氏は、詩篇形成の場を考えるよりも、まず詩経独特の表現と、その背後にあった思考の形態に目を注がれた。その検討は詩経の表現の細部にまで及んでおり、その個々の論証については論理の追いきい部分がないではないが、結論として導き出されたことは、分かりやすいものである。とりわけ、詩経に特徴的な表現様式である興きようの技法の比較検討を通じて、詩経諸篇の形成の順序として、庶民的な歌謡から、知識階層の歌へという新古の層を設定されたのである。特に、国風の詩篇と小雅（とりわけ変小雅と呼ばれる部分）とに見える興の技法の性格の変化を通して、国風の庶民的な作品が先に成立し、知識人的な思考が見える小雅の諸作品は、そのあとに出現したと結論づけられた。

白川教授も、興という技法の検討を詩経の詩篇の形成を考える重要な手がかりとしておられる。この興という技法は、顧頡剛などは漢代の歌謡にも同様の形態のものが見られると言ってはいるが、他の文化地域の古代歌謡にも、現在の民謡にも、同類の技法は、少なくとも顕著なたちでは見られない。興の技法が、詩経に見えるもつとも特徴的な歌謡のありかたの一つだとすることができらう。たとえば、国風、召南の野有死麋篇の前二章には次のようにある。

野有死麋 白茅包之 有女懷春 吉士誘之

林有樸楸 野有死鹿 白茅純束 有女如玉

この詩では、「野有死麋、白茅包之」の句が「有女懷春、吉士誘之」に対して興の関係になっている。「野原には死んだ麋のろがおり、それが白い茅ちがやにつつまれている」という前二句と、「恋心を懐く女性に、りっぱな男性が誘いをかけた」という後二句との間には、表面的に見れば、意味的なつながりがないように見える。その前後両者の関係について、松本雅明氏は、死麋を狩りの獲物だとして、次のように説明をしている。

矢を負ったまだ温味の残っている鹿が、茅のなかに倒れている。茂った茅が乱れながら、それをつつんでいる。興のリズムはなお、喘ぎつつ茅のなかにどうと倒れるさまをも想いおこさせる。そこには獲物を追いつめて来た烈しい活動、そ

れを射とめ得たよるこび、若い鹿の光沢ある毛並、それをつつみながら戦ぐ茅がある。……この秋の野に横たわる鹿が、「吉士に誘われる少女」に対比され、それを呼びおこしているのである。

こうした松本氏の詩経の読みは美しく、我々の心に違和感なく受け入れられるものである。松本氏は、興をなす前句があとの本句のための気分的な導入の役目を果たしていると考ええる。恋心を懐く少女を導きだすために、前句の鹿は、「若い」「光沢ある毛並」でなければならなかったのである。しかし、白川教授も言われるように、この詩の本文から、ここまでのことが本当に読み取れるのであろうか。近代的な感覚による恣意的な読みに陥っているという危険性はないのであろうか。

松本氏は、興の技法のもっとも根本的な機能を、興の部分が、後の本句を導き出すための気分象徴となっているのだとされる。そうして、みずからの感性を信頼して、二つの部分を掛け渡す情緒的な共通要素を、それぞれの作品から、大胆に抽出しているのである。松本氏の議論の大きな前提として、われわれ現代人の感性と詩経の詩人たちの感性とは重なる部分が大きいのだとする確信があったように見える。それとは対照的に、白川教授の議論の背後には、われわれ現代人のものとは大きく異なる、古代人特有の感性があり、独自のものの見方があったとする信念があったのである。

白川教授も、興の機能の中に、松本氏という気分象徴的なはたらきがあったことを否定されるのではない。ただ、気分象徴的な機能は、興の機能のごく一部であり、興の元来の機能が変遷して来た、その最後の様相であるにすぎないとされたのである。また、松本氏は、詩経の作品の成立順序として、その内容が、民衆的な素朴なものから、知識的な思考をこめたものへと展開したと想定し、まず国風の詩篇が成立し、そのあとに雅、頌が展開したと考えたのであるが、教授は、そうした平面的な比較では不十分であるとし、まず風、雅、頌それぞれのジャンルの中で新古の層の判別を行なうべきだとされた。

教授は、グラネの説に対しても、松本氏の議論に対しても、それぞれに詩経の特性の一部分をとらえたものだと評価はするが、その一部の特性でもって詩経全体を理解しようとしてはならないとされた。詩経は複雑な内容をそなえており、平面的、一面的な視点では、その全体をとらえることが不可能だとされるのである。そうした教授の見方は、単に詩経という一つの作品を越えて、中国の古代文化が持つ重さや複雑さへの畏敬の念に裏打ちされていたのだと思う。

松本氏の興の理解は、詩経における興の技法のもっとも新しい様相をとらえたに過ぎないとされた。白川教授は、気分象徴として興が用いられることになる以前に、宗教的な機能をそなえた興の用法があつて、それが興の起源となつていてと考えられたのである。たとえば、興の技法と関連して、詩経の中にはしばしば草摘みに言及する作品がある。周南の卷耳篇には、次のようにある。

采采卷耳 不盈頃筐 嗟我懷人 寘彼周行

卷耳（ミミナグサ）を摘むことについて、松本氏は、「征行の夫をまつ女が、思い乱れてつむさまである。これは明らかに、日常の女の行為である」と云い、日常生活の中の行為だと理解している。それに対して、白川教授は、草摘みには宗教的な意味があるとされ、摘んだ草を広い道の傍らに置くのは、その道のはるか遠くにいる人の安全を祈る呪術的な行為だとされた。

詩経の中にしばしば見える束薪（縛った焚き木）の興についても同様である。王風の揚之水篇には、次のようにある。

揚之水 不流束薪 彼其之子 不与我戍申 懷哉懷哉 曷月予還歸

この「ほとぼしる水も、薪の束を流さない」という興について、松本氏は、「水のしぶきのなかに薪の束がかかっている興は、心にわだかまりがあつて、晴々としないうことをあらわしているのであろう」と説明をする。興の機能を気分象徴だとする考えが、この詩篇の読みにも適用されているのである。一方、白川教授は、束薪は水の神への捧げものだとされ、その束薪がどのように流れるかを見ることによつて、神が人々の祈願を受け入れたどうかを確かめようとしたのだと説明される。

このように教授は、興の技法の背後に、より広く言えば詩経全体の表現の背後に、古代の宗教的觀念の存在を想定しておられる。しかし、詩経の中に宗教的な要素が存在することを指摘することが、そのまま詩篇の内容を宗教的なものとして読むことにつながるのではなかった。興の技法が、宗教行事から日常の風習へと転換するその動きの中に成立するとされているように、詩経全体も、古代人たちの呪言が日常の歌謡に移り行く、その転換点の上に成立したのだと考えておられる。聖から俗への転換領域が、文藝の成立と伝承との場を提供したと想定しておられるのである。

白川教授の論証を支えているのは、一方では、金文資料を通して復元された周代社会への深い知識である。国風の最初に位

置する周南、召南の地理的な位置づけや、邶風の諸篇を形成した歴史的な背景についての説明は、そうした知識の発露の一端だと言えるであろう。詩経全体の成立についても、西周中期以降の、冊命金文に特徴づけられるような、世襲貴族たちの社会がその基盤になっているとされる。この時代設定は、わたしにとっては、十分に説得的なものである。

王国維の中国古代研究の精華をまとめた『観堂集林』には、詩経の舞楽に注目した論文はあるが、詩経全体に対する論考は見えない。顧颉剛ら古史辨一派の古代研究の中からも、詩経については、めぼしい論文が生み出されていない。詩経の研究には長い歴史があるが、しかし詩経の社会的、文学的な本質への探究は、なお未来の仕事として遺されている。そうした探究にあたって、白川教授の仕事は、一つの確実な基礎を提供するものであり、常にかえりみられるべき原点となるであろう。

文献・

白川静『稿本詩経研究』立命館大学中国文学研究室、一九六〇年（『詩経研究通論篇』朋友書店、一九八三年）

白川静『興の研究』立命館大学中国文学研究室、一九六〇年（白川静著作集九、平凡社）

マルセル・グラネ『支那古代の祭礼と歌謡』内田智雄譯、弘文堂、一九三八年（『中国古代の祭礼と歌謡』平凡社、東洋文庫）

松本雅明『詩経諸篇の成立に関する研究』東洋文庫論叢、一九五八年（松本雅明著作集一・二、開明書院）

王国維『観堂集林』商務印書館、一九四〇年